

(表紙貼紙外題)

「玉ものまへ 上」

こむゑの院ゐんの御宇きよに、きうしゆ二
ねんのころ、とはの院ゐんのせんとうに
一人のけちよあり、のちにはたまもの
まへとそ申ける、天下てんかふさうのひしん
にて、こくちうたい一のけん女なり、
くもゐのうちにみよのかんさしこ
まやかにして、いしやうにたきものを
せされとも、らんしやのほひかうはし
くして、かたちつくるひせされと
も、ひめもすにたうりのよそほ
ひをほとこし、てうあひきはま
りなし、ゐん中の人々たかきも
いやしきも、これをもてなしか
しつかすといふ事なし、ひとへ
に天人てんにんのへんけかともおほ」(1才)
え、としのよはひはたちのうちとそ
見えにける、
かゝり ければ ゑいりよ
ふかく おほし めされて、
ゑみをふくみ ことはをやはらけ、

ないてん けてん、 ふつほうせはう
までも、 いさゝかの つまつき
なく、 いちく／＼にしゃくし

申されけり、すこしもほんせつにたかはす、」(1ウ)

【絵1】(2オ)

あまりのふしきさに、物を御たつね
ありて御らんせむとおほしめし、
たつねおはしますやう、そもく
しやうけうの中には、ほんなふそく
ほたひ、しやうしそくねはんとい
へり、日々夜々をこるところのねん
は、みなほんなふなり、このほんなふ
をはたらかさて、ほたひに入ねは
むをせうすへきかと、おほせられけ
れは、こたへて申やう、くわこのこう
いんにひかれて、なんによのかはりは
候へとも、みのうちのふつしやうほん
しやういちたいのことなれば、なんによ
のふとうあるへからす候、ほんなふ
すなはちほたひなりといへとも、おも」(2ウ)
ひにまかせ、ほんなふをおこせは、い
よく／＼ほんなふそうちやうす、身に
かひきやういきをほんどす、こゝろ

にしやうしをいとひて、ひとへにほた
ひをおこすへし、あくのすゝむるゆ
へに、ほんなふの風あらくふひて、
ふつしやふのちすひことくくこほり
なれとも、せんしんのゑにちたかくかゝ
やくとき、ほんなふのこほりとけて
水となる、せんあくのこしにおひて、
ふ一ふ二なるかゆへなり、たまくちやう
に入て、さひてをあらはんとすれ
とも、さんらんのなみきほひおこり
て、一ちんもきよからす、まれにふつ
そうにむかひて、めいめんをさとり、「
月にてらさんとおもへは、ほんなふの
くもあつておほひ、ちやうやのやみふ
かし、おこるところのほんなふまう
さうにめをかけすして、さんらんの心
者しやなにもその、まうしん心しんいつれ
よりおこるそと、ねはんのたうくわ
をあらはして、たちまちにめうたひ
をせんすへし、ちえもなくたうしん
もなき人のまへには、ふつほうせはう
へたてありといへり、けんみつ二はう
のうち^にいづれもみなしつそうなり、

(3才)

せほうの中、めのまへのふつほうをしらすして、ほたひをとをしとおもふ、たとへは、一しをへたてゝせんりとおもひ、

しよしやくを万里はんにりとおもふかことし、」(3ウ)
せけんしゆつせひとして、またくへ

ちのものにあらず、さとりとさとらさるとのちかひなり、さとりをひらき

たまへる大しせんとかかきたまへるほんもんに、すこしもたかはすと

申たりければ、ゐんをはしめまいらせちやうけきゝをよふほとの人々、

したをふるはさすといふことなし、かさねておほせらるゝやう、によしやうの

かやうにちえさいかくのある事はむかしもいまも見すきかず、りう

女のさいたんかとそおほせける、世中のふしきの事、さてもおほき

中に、てんにかわににたるものあり、あまの川かはとなつけたり、そらにかは」(4才)

のあるへきかと御たつねありけるに、そのときたまもこたへて申あくる

やうは、ししやうのおもてにめいくにとけは、いかてかしろしめさて候

へき、きやうにはたいしやくのりたま
へる大さうの、いきとこそみえ候へ、
わたくしのれうけんには、一さいのもの
にせいと申ものゝ候へは、くものせひと
こそおほえ候へ、其ゆへは、くもといふは
てんちのいきなり、月のいてたまひ
たるときは、あまのかはときこえ、あめ
のふるときは、あまの川ます、雲くも
ねつしあつき時ときはあめふり、くもの
はるれはあめなきかゆへに、くもの
なかにあまのせいとして候かと申」(4ウ)

あける、これにつけて又おほせ
いたさるゝやうは、あまのかははくも
のせいとまことにおもしろし、さ
あらは さてしやうわう しやくひやくこく
のなかに、 れんけのせい
いつれそと おほせ いたされ
ければ、 そのとき たまも

こたえて 申ける やうは、」(5才)

【絵2】(5ウ)

しやうれんけをせひとして候と申
あくる、又ていわうおほせいたされ
けるやうは、一さいのたまの中に

はいつれをせひとすへきとおほ
せられければ、によひほうしゆを
せひとして候、又うみには大かいを
せひとす、又はもろくのやまの中
には、しゆみせんをせひとつかま
つり候、又もろくのかねのなかには、
こむかうをせひとつかまつり候、も
ろくのけたものうちには、しゝ
わうをせひとつかまつり候、もろく
のきやうのうちには、ほけきやうを
せひとつかまつり候と、いちくくに
こたへ申ける、をよそ一をとへは十
をこたへ、あさきよりふかきにいた
るまでとはせたまふに、しらすと
いふ事なし、まことにこんしやの
けんけかとおほしめして、うちとけ
かたくおほしめす、うへはけしやうの
まへとなつけたまへとも、御きそ
くはひとへに女御によこかうゐのこと
し、あるときなか月廿日あま
りのころの事なるに、あきのな
こりをおしませ給て、せうりうてん
にして、しいかくはんけんの御あそひあ

(6才)

りけるに、あんはけしやうのまへ
を御そはにをかせたまひて、みす
のうちにならせたまひけるに、

折ふしあらしはけしくふひて、**〔6ウ〕**

とうろのひをふきけすところに、

けしやうの まへの みより ひかりを

はなち かゝやかる、 これは

いかなる ことそと 大しん くきやう あや

しみて 見めくらす ところに、

みすの うちより いてたる

ひかり な李、**〔7オ〕**

【絵3】**〔7ウ〕**

あさ日のひかりにことならず、くはん

けんをさしおきて、ひかりのあやし

き事をそうもんせんとするところ

ろに、ていわうおほせいたさるゝや

うは、ふしきの事なり、これなる

をんなの身よりひかりをはなち

たるこそふしきなれ、せけんの事

をかゝみにかけたるかことくに申

たにもふしきなるに、をのつから

らんしやのほひありて、ひかりを

はなすは、こんしやにもあらず、しつ

しやにもあらず、ひとへにたゞふ
つほさつのきやうかひなり、むかし
かせうそんしやのめんゑんをきくに、

まつしき女にんにてまします」(8才)

か、こかねを一りやうみつからしやう

にはせすして、はくしにあつらへて

はくとなし、たうのうちに御めん

さうのはけたるほとけのあるを

さいしきて、はくしとともにふつたう

ならんとちきりたりけるか、そのゝ

ち五十一こつかあひた、むまるゝた

ひことにこんしきのひかりをはなち

て、つゐにほとけの御てしとなつ

て、かせうそんしやといはれたまへ

ることも、ほとけにはくのゑんくち

すして、そのみこんしきにして、によら

いのしやうほうをつたへ給ひしなり、

この女人のなひてんけてんくらから

すして、ちえさいかくの人にすくれ、」(8ウ)

身よりひかりをはなちにほひを

いたすは、せんしやうにいかなるせん

こんをかうへけんと、かへすくふしきに

おほし、ふしんのことあらはみなく

たつね申せと のせんし ありて、
みすを あけ させ たまひ
ければ、 ころは 廿日 あまりの
よひやみ なれとも、 たゝ ひる
よりも あきらかなり、 「(9才)

【絵4】(9ウ)

此ほとはけしやうのまへと申つ
れとも、いまのひかりにつけて、
たまものまへとそ申ける、かやうの
ありかたきけんけの人には、たま
ものまへと申へしと、おほせいたさ
れたまひける、されはこのひかりをは
なちてよりは、すこしおそろしく
おほしめして、御かたはらにはさふら
ひけれとも、日ころのやうにはおほ
しめさゝりけり、さるほどに、すゑさ
にさふらひけるわかつてむしやう人、
すゝみいてゝ申されけるやうは、くはん
けんをは、かたのことくさうてんをは
つかまつりて候へとも、五いんと申
事をあきらめす、くはんけんと申は、「(10才)
五いんをこゝろへて、ときのちやうし
をふんみやうにしりてこそ、そのけう

もかんももよほしきふらふへし、五
ぬんにくらくてはなりかたし、五
ぬんのをこりをあきらめ候へきと
申されければ、そのときたまものまへ
こたへていはく、それ五ぬんと申は、五
そうのいきよりわかれて候、そうて
うは、かんのそうよりいてたるいき
のね、これははるなり、一さいのさう
もくのしやうするときなれば、よろ
こひとするゆへに、よろこひのこ
ゑとさたむる、わうしきは、しんのさう
よりいてたるいきなり、これはなつな
り、一さいのさうもくはみなさかゆる」(10ウ)
ゆへによつて、よろこひのこゑなり、
いちこつてうは、ひのさうよりいて
たるいきなり、とようをつかさとる
なり、つちはいつもをとらふる事な
し、よろこつたものをはこくむたの
しみあるによりて、よろこひのこゑ
なり、ひやうてうは、はいのさうより
いてたるいきなり、これはあきをつか
さとするなり、あきはさうもくその
いろかはり、かせのをともさひしく、し

かのねむしのこゑもあはれをもよ

ほすゆへに、あはれみのこゑとさた

むるなり、はんしきは、しんのさうより

いてたるいきなり、これはふゆを

つかさとるなり、なにゝつけてもき」(二〇)

はまるしふんなり、これにんげんに

たとへ、ちやうみやう六十ねんなり、ゆめ夢

のうちにゆめを見るもはやし、き

のふはけふのむかし、けふはあすのい

にしへ、うつりかはるよのならひ、ふゆう

といふむしのあしたにむまれて、ゆふ

へにしするよりもはかなき身、かし

らのゆき、ひたいにはとし月なみ

をたゝみて、うせきなみたにうるほす、

かるかゆへにかなしみのこゑなり、かやう

によくくしやうして、てうしをさくる

なりとかやうに申ける、御さにつら

ならせ給ふ大しんくきやう、いちとう

にしたをふりみゝをおとろかして、と

かく申にをよはすとそ申されける、」(二一ウ)

またそのとき、ひわのやくをする人、

それひわをは大かたそうてんつかま

つりて候へとも、いかなる人のつくりは

しめ、またはひきはしめてあるやらん、
こんけんをしらすと申されければ、
そのとき たまものまへ こたへていはく、
それひわは、 ふつきしんわうの
つくり はしめ給ふか、 なかさ
三しやく 六寸に かたとるなり、
それいちねん中 三百六十日にひやう
し七つのをゝかけ申と申ける、」(12オ)

【絵5】(12ウ・13オ)

又よこふえのやくをする人とひた
まふやう、よこふえをは大かたきはめ
てさふらへとも、それふえのみなもとを
しらすと申されければ、たまものま
へこたへて申やうは、それふえは、ばかん
と申人のつくりはしめたり、あると
きいけのほとりをすくるに、みつ
のうちにれうのきんするこゑ三たひ、
あまりにおもしろさに、なをきかん
とやすらひければ、やかて天にあかり
ぬ、そのゝちたけをきりてふくに、
すこしもたかはすさふらふなり、又
うてきといふ人、七さいにてわう
くうにそなはりぬ、てんか大きにかん

はちす、わうかなしひたまふほとに、「(13ウ)

ゆめにみたまふやうは、ふえふたつ

えたまふ、ひとつをはうてきといふ、ゆ

めさめてひとつふきたまへは、あめお

ひたゝしくふり、又そのゝちひとつ

のかんてきふきたまへは、やかててん

はれてあめやみぬ、

さてこそ 御代もひさしく

たもちたまひえ て さふらふと申ける、

扱 さて そのつきに又

しやうのやくを

つとめて□く をはつとめ候へとも、「(14オ)

しやうの こんけんを しらす候と

ありければ、 たまもこたへて 申やう、それ

しやうは、 まいくわと いひし人

つくりはしめたまふか、 こしより

うへはおんな、 こしより しもは

しやにてきふらふなり、

しやうをつくりて ふきしかは、 六月に

しものふること おひたゝしと申ける、「(14ウ)

【絵6】(15オ)

又ある人、たいこはいかにととひたまへ

は、たまもこたへて申やう、それ大こ

は、しんのほうこうといふひとつくり、又
ほうわうさんといふ所に、いしのつゝ
みあり、なるときはてんかきくもりあ
めふるなり、又かねはふしといひし人
いはしめける也、又すゝりとふてすみ
はとゝへは、こたへて、それすゝりはし
ろといふものつくりて候、ふてはもうし、
すみはなむといひし人つくりはし
めて候、又かみはさいりんと申ものす
きはしめて候と申、又おふきははんせ
うよと申ものつくりはしめて候、
又くるまはさいらうと申もの、こはせう
わうの子にたんしゆと申人あんし」(15ウ)
いたして、一ねんをかんかへ、はんのめを十二に
わり、又ひと月卅日にたとへ、しろは十
五日まで月のひかりのあきらかなるに
たとへ、くろはしも十五日よりやみにたとへ、
合て三十のいしとす、きおひおくれはせけん
のさためなれ、むしやうにたとへ、そのほか
きはうもんあり、又よろひはとゝひ給へは、し
やうかつくりはしめ給ひて候、又くむゐは
はくやくかほりそめてさふらふ、又てらみや
はかんのめいてひのときよりつくりはしめ

給ふと申、をよそないてんけてんを一事
もくからすしてこたへて申けるほどに、
ゐんをはしめまいらせて、をのくその
さにつらなれる人、あさみほめぬ
人はなかりける、」(16オ)

【絵7】(16ウ・17オ)

(表紙貼紙外題)

「玉ものまへ 下」

みんは、これをちかつけたまふこと
おそろしくおほしめしけれとも、

たい一のひしんなれば、御心さしふか

かりけるに、おもはさるに、きよく

たいふよの御けしき、よのつねの

御かせのけともおほえさせたまは

す、日にそへつゝおもらせ給ふ、てむ

やくのかみをめし御たつねありけ

れは、この御のうはつねさまの御こ

とにあらず、御しやにてわたらせ

おはしますとおほえ候と申、さらは

いんやうのかみやすなりをめしうら

なはせられよとて、やすなりをめ

してうらなはせられければ、やす

なり申やう、この御なうにつけて」(1才)

御大事いてきたりぬとそんし候、

御きたうをはしめらるへしとそそ

しける、しやうけ大きにおとろき

たまひて、きそうかうそをしやう

し、大ほうひほうの御きたうあり

けれども、つゐにそのしるし

おはします、いよくおもらせた

まへは、たまものまへかておとりた

まひつゝ、むしやうさかひなれは、を

くれさきたつならひをは、さて

もかねてよりおもひしとは

いへとも、いまわかれんとおもへは、

ひつめつのたうにまよひなかき

わかれをわすれぬへきよしおほせ

ければ、たまものまへ申けるやうは、**(1ウ)**

われらていのほんふに、かたし

けなくせうてんをゆるされまい

らせ候のみにあらず、あまつさへ

てうあひをかうふり候事、これ

くわこのかひきやうありかた

おもひ候、あわれまんこうもたも

たせおはしませかしとこそ、きね

ん申さふらふところに、なにこと

もおはしまし候は、一日へんし

も世になからふへしともおほ

えすとして、なみたをなかし、ふし

しつむはかりなり、さていろくの

御りうくはんまたはやくいのかみ

あまためされて、御たつねあり

けるに、やすなり申やう、かんもん」(2才)

のさすところ、いさい申あけたく

候へとも、もしゑいりよにそむき

申候はんとしんしやくつかまつり候

と申、くきやう一とうにのたまひ

けるは、はゝかるところなく申あ

くへきよしおほせらるゝあいた、

そのときやすなり 申やうは、

御なうは へちのしさい候はず、

たまものまへの わきにて候、

この人うしなひなは、 やかて

御へいゆふ あるへし」と」(2ウ)

申ければ、 御なふは さて おきぬ、

これを のみ なけき あへり、

かさねて 御たつねありけるに、

やすなり申やう、

しもつけの 国なすのと 申ところに、

八百さいを へたる きつねなり、 たけ八尺

け七いろ をふたつ

御さ候なり、 このものゝわさと申けり、」(3才)

【絵8】(3ウ・4才)

そもくゆらいを申せは、にんわう

きやうにとかれて候むかし、てんちく
にわうあり、なをははんそく大し
と申なり、けたうのけうくんに
よりて、千人のわうのくひをきつて
はかのかみにまつりて、そのくら
ひをとらんとこゝろさして、すまん
のりきしおにのわうをあつめて、
わうしやうへをしよせ、わうをからめ
とるほとに、九百九十九人のわう
をつけとり、いま一人のわうかけた
り、これよりきたへ一万里まんりゆきて、
わうあり、なをはふみやうわうといふ
をとらへて、かすにみてたまへと申、
さらはとてつかはして、わうをとり」(4ウ)
ぬ、みな一とにくひをきりて、はかの
かみにまつらんとしけるところ
に、ふみやうわうたいしに申やう、
ねかはくは一日のいとまをゆるし
給へ、三ほうをらいし、しもんをくやう
せんと申ければ、一日のいとまをゆる
されぬ、くわこの七ふつのほうにより、
百人のそをしやうして、はんにや
はらみつをよませしに、たい一のほ

うしけをといはいはく、こうしやう

しゆんこむ、けんらんとうねんととき

ぬ、ふみやうわうこのけをきゝて十

二ゐんゑんをさとる、はんそくたいし

もおなしくちやうもんして、たち

まちにあくしんをひるかへして、「(5才)

千人のわうにあひて、もろくのとか

あるにあらず、われげとうにすゝ

められて、あくゐんにひかれぬ、

いまはをのくほんごくかへりたま

て、はんにやをしゆきやうして、ふつ

とうなりたまへとて、かへしたまひ

ぬ、はんそくたいしもたうしんを

おこしたまひて、しやうほうをえたる

と見えてさふらふなり、むかしはん

そくたいしはかのかみといふは、いま

のきつねにて候なり、ふつほうの

いりきによつて、くひをきらさる

あひた、はかのかみふつほうをかたき

として、しやうくをふるとも、きつね

のみをうけて、ふつほうはんしやうの「(5ウ)

こくとにけんして、かういのうねめ

となつてちかつき、わうのいのちを

うはい、われくにのわうとならんと
ちかひけるなり、にほんはそくさん
のせうこくなれとも、ふつほうはん
しやうのくにたるあひた、いまあら
はすへし、これすなはちたまもの
まへなりと申あひた、ひそかに
このことを そうもんしけれとも、
御しんようなかりける に、
みなくいかゝせんとひやう
ちやう あり けるに、「(6才)

【絵9】(6ウ)

やすなり申やう、たいさんふくのまつり
をつかまつり候はん、たまものまへを御
へいとりのやくにいたさせ給へと
申あひた、しかるへしとて、しゆく
のものをこしらへまつらんとしけ
るとき、たまものまへをへいとり
にちしやうしするところに、この女
はう、かほのけしきそんして申やう、
いやしきとは申なから、かたしけな
くもわういにちかつきたてまつり
しものなり、それさいれいのへいとり
と申は、いやしきけちよしもへのやく

とうけたまはり候へ、さしもおほき

人の中に、われ一人にかきりてはち

をあたへられ候かと、いこんふかけに」(7才)

申に、大しんの給ひけるやうは、しやく

よしの御やうしは、さうこそくそうしやう

をもつてときのきつけうをさため、

としと月と日とときとそうしやう

するをもつて、きたうのしやうしゆ

とす、ゐん中になん女のかすありと

申せとも、そうしやうせさせ給ふ

によつて、おんやうのかみさしたて

まつる、そのうへきよくだいつゝかな

くおはしまし候はんこそ、御みも御み

にて候はんつれ、いかやうのいやしき御わ

さも、なにかくるしく候へき、御なう

へいゆふのため、たいさんふくのへい

とらせたまひて候はんする御こゝろさし

こそ、かむし候はんに、すへて御身をは」(7ウ)

そしりはさふらふましと申され

ければ、そのときたまものまへは、

たうりにせめられつゝ、そのきな

らはいかやうにもおほせにしたか

はんとて、いてたちけるとこそきこ

えける、けふをはれと　しやうそく　きつゝ、
すてに　へいを　とりて　さいもんを
よみけるなかはに、　御へいをうちふると
見えて、　いろへんしてかき

けすやうにうせにけり、」(8才)

【絵10】(8ウ)

やすなりか申ところすこしもたかは
す、かのきつねをうしなひ候へきと、
みなくせんきあり、ぶしをあつめ
てからせはやといふ人もあり、ま
たあるくきやうのせんきには、
ちくるいといひなから、てんぢく
しんたん日ほん三こくにけんけ
して、しんつうじさいをゑたるもの
なり、ふつりきほうりきにても
しりそけかたし、いはんやほんふの
ちからにてはかなひかたしと申
されける、またあるくきやうの
せんきには、ほとけのときえた
まはぬしゆしやうをも、ほんふのよ
りてけとしたることもあり、わか」(9才)
てうてはけのあらはるゝは、日本
にてうすへきゆへなり、ゆみやの

なをえゆみをいるほどのものなと

いとゝめさるへき、かんでうのけいかは、

九の日をいをとし、しんのしくはう

は、かすみのかりをいをとし給へり、

いまも日ほんになをえたるゆみ

とりをあつめてからせんに、なに

のしさいのあるへきと申されければ、

をのくもつともこのきしかるへ

しとてきたまりける、さるほと

に、いてをたつねられけるに、かつさ

のすけみうらのすけりやう人に

きたまり、いんせんをそくたされけ

るに、りやうすけきやうすいして、**(9ウ)**

しやうゑにたてゑほしをちやく

し、ひさまつきて三とはいして

うけとり申ける、とうこくにゆみや

とりおほしといへとも、身にあてゝ

ゐんせんくたさるゝ事、いゑのめん

ほくときのめいよ、なに事かこれ

にしかんや、みな一人ものこらす

かのところへかかけてゝ、ゆみのひしゆ

つとつくすへしとて、いゑのこ

らうとうをめしつれて、われさき

にとかけていてけり、かの野^のを見る
に、へうくとしてくさふかく、人

のわけ入へきやうもなし、しかり
といへとも、すたをもつてくさを

きりはらひかりのけ、むまにま」(10オ)

かせてかけ入ける、おのくひしゆ
つとつくして、かけまはすと

ころに、 いかにも 大きなる

おの ふたつある

きつね、 くさむら の中より

はしりいてたり、 りやうすけの ちうもつとも、

われさきにくと かけまはせとも、

かのおふたつある」(10ウ)

きつね、 しんつうを

えたる もの

なれは、 ゆんてに

あへは めてへ

きれ、

めてに あへは

ゆんてに

きれ、 したを

くくり、 むくう

しさい に

はしり ける、「(11オ)

【絵 11】(11ウ・12オ)

かのきつねは、しんつうじさいなる

あひた、つゐにをいうしなひ

ける、そのときひとくわれらか

ゆみのふんにてはかなふへからず、く

にへかへりてゆみのはかりことをめ

くらし、そのうちかるへしとて、

めんくにいゑくにかへりける、

かつさのすけかはかりことには、はや

きむまにまりをつけて、まりのお

つるところをやところとして、かけ

まはしけり、みうらのすけかはかり

事には、いぬはきつねににたるもの

なれはとて、いぬをかけさせて百日

けいこして、やところをおほへ、その

ち又なすのにおもむきて、いま」(12ウ)

をさいことかりまはしけるに、な

をくかりえすして、七日なよとう

りうす、しかれはいゑのこわかたう

もみなくくたいくつす、そのときりや

うすけひやうちやうするやうは、

此ことによりてわれくなくくゆ

みやにきすをつけんこと、しやう

かひのちそくこれにしくへからす、

こゝろのはやることは、はんくはいち

やうりやうにもをとらしとおもひ

けれども、むせんのせうふにも

あらされは、いのちをうしなふにも

あらず、しよせんこのきつねをかり

えすは、ほんこくにふたゝひかへる

へからす、ゆみやをすてゝさんりん」(13才)

にましはり、うちかみをすてた

てまつる身となるへし、なむにつほん

こくちうの大小のしんき、そうし

ていせてんしやうくほう大神八まん

大ほさつうつのみやの大みやう神、

みやうにちの中いきつねをわれ

くかてにかけてかりとるやうに御

なうしう候へ、いかなるしんつうしさ

いのきしんなりとも、わうゐにお

それさるへき、われくをほんこくに

かへし給ふへき、しんへんをもつ

てつげしらせたまへと

きねんし、すこしまどろ

みたる みうらのすけかゆめに」(13ウ)

としのよはひはたち はかりの女ほう、
見め かたち すくれたるか、
なみたをなかして申やう、 こんとはからさるに、
いのちをうしなはんと うらみの中の うらみなり、
わかいのちを たすけたまへ、
しゝそんくまほりの

かみとならんと 申ければ、「(14才)

【絵12】(14ウ)

みうらのすけ夢ゆめのうちに、まつた
くわたくしにあらす、ちよくちやう
のおもむきなり、われをうらむる
ことなかれと申とおもへは、やかて
ゆめさめぬ、さて人々をちかつけ
て、まどろみたるゆめにふし
きのゆめを見る、こんにちきつねを
とゝめんことあむのうちなり、はやく
うちたてやとて、おのくかのゝへかけ出
て、かりまはすところに、かのきつね、のより
山へむかひてはしりいらんとするとこ
ろを、みうらのすけゆんてにあひつけて、
そめはのかふらやをもつて、ちうにいを
としける、ゑたりやとやこえしてみれば、
きゝしよりもおひたゝしきものなり、「(15才)

【絵 13】 (15ウ)

これを持ってよるひるいそきのほ

り、はやく御めにかけて申さんと

て出にける、みやこにていそきたいりへ

上にけり、ゑいらんありて、せんたいみ

もんのことなりときよかんのあまり

に、なんちなすのにてかりたるしやう

そくをたかへすして、御まへにてふる

まふへしとて、あかきいぬを一ひき

いたされたり、さるほとにりやう

すけ、よきむまにきんふくりんの

くらをきて、きりふのやをひ、しけ

とうの弓にそめはのかふらやつかひ、

かけまはず、ゐん中の上下これを

けんふつし給ひぬ、さてこそたうし

までも、いぬをものとなつけしかは、「(16才)

きつねはほうさうにおさめられたり、

くはしき事はきろくにあり、

一、きつねのはらの中に、こかねたう

あり、このたうにふつしやりあり、これ

をゐんへめされける、又ひたいにしろ

きたまあり、よるひるてらすとく

あり、これはみうらのすけとるなり、

一、ふたつのおのさきにけんあり、
一はしろし、ひとつのおはあかし、
しろきおは、かつさのすけとる、
いまひとつのあかきおは、

ちなひにおさむる、「(16ウ)

【絵14】(17オ)

そのうちに、かつさのすけはへいけ
をうらむる事 ありて、

このつるきを いつの国くに
におはします ひやうへのすけとの
に
たてまつる、 そのすひさうに かりて、

世をとり給ふ、「(17ウ)